それはほんのことでございまするか。

善次郎。　さあ、そんな事もありさうな、無さゝうな。して、こなたはそれを何處から聞かれた。

徳兵衛。　今夜さる所で聞きました。おいとしや市郎右衛門様は、御勘當の身となられたとやら。

善次郎。　え。勘當……。(ぎつくりして。)それはほんの事でござるか。

徳兵衛。　いや、それはこちらからお尋ね申すこと。おまへは親身の御兄弟、よう御存じの筈ではござりませぬか。

善次郎。　(氣をしづめて空嘯く。)わしが先刻出て來たときには、兄貴は確かに内にゐられた。勘當は大方その後のことであらうよ。さん〳〵に野良をかはいた兄貴、かうなるのも自業自得ぢや。はゝゝゝゝゝ。

おかん。　淨〳〵身のしが隱す空笑ひ、知らぬ女房むつとして。市さまの御勘當は噂を聞くさへもお氣の毒。なんぼ商賣が商賣でも、お客を倒すが見目でもないと、内の人もさつきから溜息ついて居られまする。まして親身のお前様、さだめて胸が痛からうにと、お察し申して居りましたに、自業自得とあきらめて、笑うてゐらるゝ胸の廣さ。市様もよい弟御を持たれて御仕合せ、お羨ましいやら悲しいやらで、ほんに涙がこぼれまする。

淨〳〵當てつけられて逆らはず。なるほど私も兄弟のよしみに、胸も痛む、あたまも痛む。さりとてもう勘當されてしまふた兄貴を、どう執成さう術もないわ。

善次郎。　(奥よりお金は座蒲團を持出して來る。おかんは出すには及ばぬと眼で知らせる。)

善次郎。　(横眼にみて。御亭主、話はそれぎりでござるか。(起ちあがる。)

徳兵衛。　お引留め申して相濟みませぬ。

善次郎。　夜が更けたらぞく〳〵と寒うなつた。いつもの泥鰌屋で一杯遣らうか。

淨〳〵云ひ捨てゝこそ出でにけれ。

(善次郎は足早に向ふへ去る。おかんは睨立たしげに見送る。)

おかん。　ても、あんまりな善次郎様。兄ごの勘當を高見の見物とは……。

徳兵衛。　もう云ふな。勘當された兄御のあと追うて來たかと、こつちの心に引きくらべて、思ひ遣つたは賞ひかぶり。あんな不人情な弟では、そばから親御に藥をくべ、一緒になつて親身の兄を叩き出したのかも知れぬぞよ。それにしても、お島はなぜ遲い。あれが歸るまでは

落着いても寢られまいが、兎もかくも奥へ行つて置炬燵でもせうか。

おかん。　それがようござんす。そんならお金、いつものやうに炬燵の支度をしや。

お　金。　あい、あい。

徳兵衛。　お島が歸つたら再び外へは出すまいぞ。

浄〻蟲が知らすかおちつかぬ、胸を抱へて入りにける。

（徳兵衛を先に、おかんとお金も附添ひて奥に入る。）

浄〻來る春を、待たで散り梅、飛び梅や、天滿屋お島は醉ひくづれ、思ひくづれし千鳥足。

（向うより天滿屋のお島は酒に醉ひたる體にて、善次郎の胸ぐらを掴みて出づ。）

善次郎。　これ、これ、わしを何うするのぢや。

お　島。　はて、お前も手の惡い。なにが怖うて逃げさんす。おまへには禮云ふことがたんとある。さあ、ござんせ。

浄〻相手は女子、突き倒しても逃げられず、迷惑ながら善次郎、引つ立てられて歩み來る。

（善次郎は捨臺詞にて宥むれど、お島は承知せず、無理無體に店さきへ引摺つて來る。）

浄〻お島は取つたる手をゆるめず、男の顔をぢつと見て。

お　島。　これ、善さま。醉うて管まくと思はんすな。一度や二度の附合ひでも、たがひに顔を見あはせたら、挨拶するが浮世の義理といふもの。市様とわたしとは蜆川でも隱れのない仲、その兄嫁のわたしの顔をよもや見忘れはなされまいに、挨拶もなしに逃げ隱れる、お前の心がどうも讀めぬ、お前、わたしに出會うては、濟まぬことでもござんすのかえ。

善次郎。　（どぎまぎして。）いや、いや、別に仔細はない。夜目遠目でうつかりと、こなたの顔を見損じたまでのことぢや。無禮は御免、この通り。

浄〻手を下げても堪忍せず。

お　島。　なんの、さうは抜けさせぬ。しら〳〵しいあの顔はいの。たつた今まで近江屋で、おまへの兄様と逢うてゐて、けふの様子は聞きました。掛硯の鍵を入れてある鼻紙袋、おまへはよう教へてくだされた。先づそのお禮から云はねばならぬ。

善次郎。　や。

お　島。　成程その鼻紙袋には、わたしの文も入れてあつたれど、それを敎へてくだされたお前の深

切、ありがた過ぎて怖ろしい。いとしいは市郎右衛門様、自分の律義一途の心に引きくらべて、おそろしい弟御の深切を眞に受けたが一生のあやまり、悔んでも恨んでももう遅いと、おとなしく諦めてゐらるれど。わたしは女子ぢや。女子は心の狹いもの。恨むだけは屹と恨む。もし、善さま。それが無理か、無理かいの。

善次郎。　浄〻胸ぐら掴んで引きまはせば、善次郎も持てあつかひ。

これ待たつしやれ、息が詰まる。たつた今もこゝの女房に、當付らしいことを云はれ、かさねてこなたに恨みを云はるゝ。こりやなんといふ不仕合せか。

お　島。　(あざ笑ふ。)ほんにお前は不仕合せぢや。惡いことは自分がして、咎は他人にまぶし付け、兄様を追ひ出して、おのれがぬく〳〵と家督を乘つ取る。ほゝゝゝゝゝゝ、その不仕合せが羨ましい。わたしが大事の市様も、せめて半分でも四半分でも、お前の不仕合せにあやかつたら、斯うしたことにもなるまいものを……。思へば〳〵腹の立つほどに羨ましい。前の不仕合せ、わたしも祝うて進ぜませう。

浄〻又むしり付き獅嚙み付く、女の恨みのおそろしく、善次郎ぞつとして。

(お島は善次郎に獅嚙みつきて屹と睨めば、善次郎は思はず身をすくめる。)

善次郎。　はて、執念ぶかいにも程がある。わしはなんにも知らぬと云ふに……。

お　島。　知つてか知らずか、今更そんな詮議をするのぢやない。なにも彼も正直に云うてしまへば市様の身分は立つことなれど、養ひ親に義理を立て、なんにも云はずに身を引いた、切ない苦い胸のうちを思ひ遣るほどいぢらしい。(泣く。)もし、善さま。わたしはお前を殺したい。わたしと一緒に死なんせぬか。(摺寄る。)

浄〻こなたはいよ〳〵薄氣味惡く。

善次郎。　えゝ、めつさうなことを云ふ。こりや酒亂とみゆるな。(起ちあがる。)

お　島。　えゝ、卑怯な。逃しはせぬ。

浄〻又取り付くを突きのけて、逃げんと犇く物音を、女房聞きつけ走り出で。

おかん。　(出づ。)あ、これ、お島ぢやないか。相手はさつきの善次郎様。おまへは何しに又こゝへ。

善次郎。　たゞこの女に引摺られて來たのぢや。腹立上戸か、泣上戸か、酒亂の女にからみ付かれて甚だ迷惑。あとは宜しくたのみます。

浄〻頼む頼むとばかりにて、地獄の難を逃れし心地、ふり切り摺拔け逃げてゆく。

(お島は又追はんとするを、おかんは支へる。この間に善次郎は上のかたへ早々に逃げてゆく。)

浄〻相手なければがつくりと、お島はあがり口に醉ひ倒れ。

お　島。　あゝ、喉が渇く。水をくだされ。

おかん。　あい、あい。おとなしくこゝに待つてゐや。うたゝ寐して、かぜ引きやんな。

浄〻寐顔のぞいて奥へゆく。あとは表もひつそりと、人足まばらに時雨して、月も陰る眼も陰る、心もくもる市郎右衛門、笠かたむけて來りしが、天満屋の店にはお島の姿、ついでよしと忍び寄り、聲をかけんとするところへ、女房は取つて返し。

（向うより市郎右衛門、脇差と杖の折れとを腰にさして出で來り、お島の寐てゐる姿を見つけてそつと忍びよる時、奥よりおかんは茶盆に湯呑をのせて出づるに、市郎右衛門はあわてゝ下手奥にかくれる。）

おかん。　これ、お島。今夜はいかう醉うてゐるさうな。これお島。茶をくんで來た。早う飲みや。

浄〻優しくいへば押しいたゞき。

（おかんは捨臺詞にてお島をかゝへ起す。）

お　島。　これはかたじけない。勿體ない。ほんにお主ともあるべき人が、手づから汲んで下さんしたこのお茶、拜んで頂いて飲みまする。

浄〻云ふ顔つく〳〵とうち眺め。

おかん。　あらためて禮を云ふことか。抱へよ主人よといふは商賣の表、他人の娘をあづかつてゐるからは、大事にかけるが義理人情。こちらで恩にきせることも無し、そつちで恩に被るにも及ばぬ。したが、その義理にからまれ人情にほだされて、あんまり深入りする時は、間違ひも又おこり易いもの。そこを程々にするがむづかしい。いや、いや、今夜は大分醉うてゐるらしく、こんな意見も身にしむまい。なにかのことは明日あらためて云ふほどに、今夜は二階へ行つてもう休みや。

お　島。　あい。

おかん。　わたしが手を取つてやりませうか。

浄〻醉はさめても力なき、足の踏途も定まらず、かゝへられたる兩腕を、命とたのむ蔦かづら、木曾の棧橋ならねども、あやふき階子よろ〳〵と、伴はるゝぞ哀れなる。

（お島は茶をのみ終りて、起たうとして起ちかれ、これが別れといふこゝろにて女房の顔を見あげる。おかんはお島を抱き起して、やう〳〵に上のかたの階子より二階へ連れてゆく。下のかたよりお花は急ぎ足にて出づ。）

お花。　おゝ、こゝにぬいであるは島様の履物、わたしより先へ戻つたとみゆる。

おかん。　（二階より降り來る。）お花、戻りやつたか。お島は疾うに戻つて、たつた今二階へ寐かして來た。もう夜が更くる。とりわけて今夜は用心が肝要。雨戸をしつかりとおろして置きや。

お花。　あい、あい。

（お花は門口の行燈をおろす。）

おかん。　おゝ、また薄月が出たさうな。

（この時、二階の障子を細目にあけてお島は表をうかゞひ、おかんと顔をみあはせて障子をぴつしやり閉める。）

淨瑠大戸おろして。

（おかんは二階をみあげて不安の體。お花はそこらを片附ける。）

（二）

天満屋の塀外。前の二階つゞきの心にて、下のかたに障子をしめたる欄干つきの二階家あり。前づらは黑の板塀にて、上に木戸口あり。塀のうちには松の立木、土藏の白壁など見ゆ。おなじ夜。

淨瑠臥しにけり。善次郎は一旦逃げ退きしが、先刻のお島がうらみ、膽に堪へておそろしく、兄の安否、女の身の上、おぼつかなさに立歸れば、市郎右衛門も忍び足。

（上のかたより善次郎は頭巾をかぶりて出で、塀の外にて内をうかゞふ。下のかたより市郎右衛門はあみ笠をかぶりて出で、くらがりにて思はず善次郎に突き當れば、二人はおどろきて飛び退き、たがひに透し合ひながら善次郎は下のかたへ行き過ぎる。）

淨瑠内外に氣を配り、眼をくばり、男はたゝずむ塀の外、小聲に合圖の咳きすれば、お島もそつと忍び出で。

お島。　市様か。

市郎右。　お島か。

淨瑠顔はみられぬ暗がりに、お島は機轉に柄付の鏡、うす月に照して閃めかし、こゝにあるとぞ知らすれば、男はこゝろえて脇差ぬき、刃のひかりに物云はせ、上と下にて招きあひ、盡きぬ名殘りを惜みける。善次郎再び走せかへり。

（下のかたより善次郎再び出づ。市郎右衛門はそれに心付き、すれ違ひて下のかたの塀外にかくれる。お島は障子を閉める。）

善次郎。（木戸をたゝく。）もし、もし、長柄の市郎右衛門といふ人、こちには見えませぬか。

お　花。（塀のうちにて答へる。）いえ、そのお方はこちらには見えませぬ。近江屋をたづねて御覧なされ。

善次郎。その近江屋で尋ねたら、はや歸られたと申すこと。すこし氣がかりの事あつて、引返してこゝへ來ました。どうでもこゝには居られませぬか。

お　花。はて、くどい人ぢや。夜更けてそこらを叩きまはられては世間の迷惑。早う行んで下さらぬか。

善次郎。淨〻聞いていよ〳〵心許なく。そんなら近江屋をもう一度。

淨〻たづねて見んと走りゆく。弟のこゝろを知らざれば、兄は憎さげに見送りて。

（善次郎はあわてゝ向うへ走りゆく。）

市郎右。市郎右衛門を破滅させた憎い奴。こゝで出逢うたを幸ひに、追ひかけて討つて捨てん。

淨〻行きかけて、いや、いや、いや。

（腰にさしたる杖の折れがわけ落ちて、市郎右衛門はつまづく。）

市郎右。こゝで討つて捨てるほどならば、親の前でなにも彼も有體に打明け、かれを科人におとす筈。それを云はずに勘當うけたは、養ひ親へ一つの義理。（杖の折れを拾ひてぢつと見る。）

淨〻今更たれを恨まんと思ひなほして立戻り、足もとの小石を二度目の合圖。

（市郎右衛門は小石を拾ひて二階に打ちつける。お島は再び障子をあける。）

お　島。（小聲に。）市様。さつきから抜けて出ようと氣をあせれど、用心が嚴重で所詮出られぬ。

市郎右。最期は一緒と思へども、この上は是非もなし。われは在所の堤にて。

お　島。わたしはこゝの二階にて。

市郎右。場所は變れど時刻はひとつ、連立つ道も……。

二　人。唯一筋。

市郎右。一番鶏の鳴くを合圖に……。

お　島。合點でござんす。

淨〻迷ひたまふな失るゝな、やがて逢はうの契約ちたがひにあたりを憚りて、伸びあがり振返り、別れゆくこそ。

（市郎右衛門は見かへりながら上のかたに入る。お島は見送りて障子を閉める。舞臺は眞暗にな

りて長柄堤に變る。）

（三）

長柄堤の夜のけしきにて、うしろは一面の黒幕。正面は土手にて、裾には枯芒生ひたり。土手の下のかたには河原へ降りる坂路ありて、平舞臺には枯柳立ちたり。

淨瑠璃悲しけれ。長柄堤も冬がれて、河原に白き夜半の霜、消ゆる二つの玉の緒も、内と外とに引きわかれ、路は一里を隔つれど、たがひに連れてゆくこゝろ、男は腰に脇差をさして行く手はふる里に近きところと思ひつめ、足弱車小車の、しゞみ川より來りけゝ。

（上のかたの堤より市郎右衛門は笠をかぶらず、お島と連れ立ちたるこゝろにて、たゞ一人あゆみ出づ。）

市郎右。（向うをみる。）おゝ、あれに見ゆるが長柄の在所。大坂に生みの親があるとは聞けど、顔も見しらず名も知らねば、未來でめぐり逢ふとても、名乘り合ふべきよすがもなし。うみの親より育ての親と世のことわざにも云ふ通り、やつぱり在所の親父さまを、まことの親ぞと心得て、今この際にあらためて不孝の御詫をせねばならぬ。

淨瑠璃かたぶく月をたよりにて、河原に降立ちひざまづき、在所の方を伏拜み、しばし涙にくれけるが、やがてふつと心づき。

（市郎右衛門は河原に降りて、向うを伏拜む。）

市郎右。はて、不思議や。月にむかへど我影の、水にもやどらず、土にも映らず、われは烟かまばろしか。おゝ、今こそ思ひ當つたれ。まことや昔の物がたりに、死ぬる際には人の魂は身をはなれ、その身の影の無しと聞く。わが魂はいつの間にか藻ぬけの殼となつたるよ。して、お島は……お島、お島……。

淨瑠璃いづこにあるぞと見廻せば、夢かうつゝか幻か、女の形茫然と迷ふが如くにあらはるゝ。

（河原の上のかたにお島の姿あらはる。）

市郎右。おゝ、お島。そこにゐたか。

淨瑠璃われを忘れて駈寄れば、女もなつかしゆに牽かれ來る。

市郎右。さあ、一里にあまる道中を、人にも犬にも怪まれず、かうしてこゝまで來るからは、もうなんにも氣遣ひ無し。近江屋の筆を借りて、走り書の一通……。（ふところより書置を出す。）

そなたもしつかり持つてゐるであらうな。

浄〻云へば女もうなづきて、内ぶところより取り出す一通、柳の下に置きならべ。

（お島も書置をとり出せば、市郎右衛門はうけ取りて柳の下にならべる。）

市郎右。そなたは母へ、われは父へ、思ひ〳〵の申譯。

浄〻なみだも凍る、身も凍る、霜夜に吠ゆる犬の聲。

市郎右。え〻、さう〳〵しい野良犬め。人に聞かれたら最期の妨げ。

浄〻追ひ散らさんと振りあぐる、杖は大事のかたみにて、勿體なやと押しいたゞき。

（市郎右衛門は犬を追ふこゝろにて、杖の折れを振上げようとして、又戯に心づく。）

市郎右。それに付けても邪魔なきうちに……。犬の聲など聞きたうない。たゞ待たるゝは一番鶏。鶏は啼かぬか、まだ啼かぬか。（云ひかけて又心づく。）や、お島は……。たつた今までそこにゐたに……。お島……。

浄〻見えぬ女のおもかげを、たづね迷ふぞ。

（舞臺は再び眞暗になりて、もとの天満屋の二階に變る。）

（四）

浄〻哀れなる。お島もおなじ思ひにて、今か今かと待ちわびしく。

（二階の障子をあける。）

お島。一番鶏の啼くを合圖と、かねて云ひ合はせてあるからは、市様もう長柄堤へゆき着いて鶏の啼く音を待つてゐよう。

（鐘の聲きこゆ。）

お島。おゝ、鐘が鳴る……やがては鶏が……。一番鶏が……。

浄〻かぞふる鐘の音に連れて、男の姿あり〳〵と障子の前にあらはるゝ。

（市郎右衛門出づ。）

お島。おゝ、市様。お前はこゝへ來て下さんしたか。これでわたしの念もとゞいた。かうしてお前と一つにゐて、やれ嬉しやと思ふにつけ。

浄〻過ぎし昔が忍ばるゝ。去年の霜月顔みせの、芝居がへりの船の中。

お島。おまへが好きな浄瑠璃を語りあかした面白さ。

お島。　浄瑠璃道頓堀から蜆川、あがればすぐに近江屋で、夜寒をしのぐ置炬燵。ほんに思へば一年は夢の間。人間のたのしみも夢の間。おゝ、こんなこと云うてゐたら限りがない。もし、お前。もうなんにも思ひ殘すことはござんせぬかえ。浄瑠璃たがひに見かはす最期の笑顔、なみだ隱して……。

（二人は手をとりて顔をみあはせる。鶏の聲きこゆ。舞臺は三たび眞暗になりて、もとの長柄堤に戻る。）

（五）

長柄堤。

（念佛の僧は提灯を持ちて上のかたより出づ。あとより善次郎は追つて出づ。）

善次郎。　もし、もし、御出家様。

僧。　はい、はい。（提灯のひかりに照しみる。）おゝ、善次郎殿ではござらぬか。

善次郎。　おゝ、戒念殿か。生憎に月が暗くなつたので、あかりを借りようと存じた處。こなたに逢うたは丁度幸ひぢや。もしやこゝらで内の兄貴には逢はつしやらぬか。

僧。　市郎右衛門殿には宵から一度も逢ひませぬ。こなたは兄御を探してござるのか。

善次郎。　少し氣がかりの事があつて、そこらを探し廻つてゐますが、在所はもう眼の前、こゝまでに逢はねば的がない。

（善次郎は思案しながらたゝずむ。上のかたの河原にて鶏の聲きこゆ。）

善次郎。　いつもは勇ましい一番鶏が、今夜はなにやら氣にかゝる。あゝ、忌な聲ぢや。もし戒念どの。御苦勞ながらわしと一緒にその河原へ降りてくださらぬか。

僧。　はい、はい。

（善次郎は僧をせき立てゝ、下のかたの坂路より河原に降りる。柳の下には編笠の上に脇差の鞘が乗せてあり。）

善次郎。　や、これは……。（提灯のひかりに照してみる。）見おぼえのある脇差の鞘とあみ笠……。

僧。　して、それは誰のでござる。

善次郎。　（それには答へず。）えゝ、遅かつた。兄者人……市郎右衛門どの……。

（脇差の鞘と編笠とをかゝへて、善次郎は狂氣のごとくに上のかたへ走り入る。僧は提灯を持つたるまゝ呆れて見送る。鶏の聲、水の音。）

この悲劇二幕は前卷の「天の網島」とおなじく、近松翁の世話淨瑠璃による。（作者）

―幕―

兒

淵

明治四十四年十月作。

明治四十四年十二月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割――自休藏主（藤澤淺二郎）白菊丸（澤村宗之助）信夫（村田嘉久子）櫻子（佐藤千枝子）龍女（鈴木德子）など。

登場人物――自休藏主。兒白菊丸。おなじく春若、冬若、市若、乙若。白菊丸の姉信夫。長者のむすめ櫻子。賤の女實は龍女。ほかに職人。商人。女房。娘。濱の女。供の男など。

第一幕

（一）

時は平家の世盛り、春のころ。

鎌倉松葉が谷、相承院の門前、門内より櫻の大樹の枝さし出でゝ、今や花の盛りなり。

（童の手をひきたる女房、里のむすめ二人、物を荷ひたる商人風の男、職人風の男、いづれも繪卷にあるやうなる服裝にて、門前にたゝずむ。）

女房。　これ、御覧なされ。櫻は今が盛りでございます。

娘甲。　鎌倉に數多いお寺のなかでも、この相承院は昔から櫻の名所でございます。

娘乙。　このごろは花見がてらに御參詣も定めて多いでござらう。

商人。　なにさまこゝの花は鎌倉一であらうよ。いや、鎌倉ばかりでない、坂東廣しと云へど、これほどの名木は多くあるまいと云ふ噂ぢや。

職人。　はゝ、井の蛙大海を知らずとか云ふのは、お身達のことぢや。わしは五六年前に京登りして、名所舊蹟のこらず見物して來たが、花は東山、祇園、清水、嵯峨、御室、どこもかしこも繪にあるやうに美しいものであつたぞ。それに比べたらこゝらの櫻は、折つて碎いて薪にしてもよいくらゐぢや。

女房。　お前は一度京をみたと云うて、いつも〳〵自慢爲やしやるが、京の櫻はそのやうに見事でござるか。

娘甲。　わたし等が知らぬと思うて、よい加減の嘘を云ふのではないか。

娘乙。　もしそれがほんたうなら、わたし等も一生に一度は、京へ登つてみたいものぢや。

（門内より日菊丸、十六歳、美しき兒、童水干、大口袴、草履にて、腰に聖柄の短刀を漢竹の鞘

（笛）をはさみ、忍びやかに出で來りて、この問答に耳をかたむく。）

商人。　京は日本の都、王城のあるところぢや。見るもの、聞くもの、こゝらとは流石に違ふであらう。

職人。　おゝ、なんで私が嘘をつかう、眞實誓文まことのことぢや。まあ、だまされたと思うて一度みて來なされ。大抵のものは歸るが嫌になつてしまふぞ。

（白菊丸、つか〳〵と進み出づ。）

白菊。　これ、職人どの。都はそのやうによい所かの。

職人。　おゝ、お兒どの……。聽いてござりましたか。

白菊。　さつきから皆聽いてゐました。みやこで美しいは花ばかりではござるまい。人も屋敷もみな美しいものでござらうな。

職人。　それは勿論のことでござります。家屋敷は檜作りで、男女の着物は綾錦、こゝらとはまるで世界が違ふやうでござります。廣い大路には柳櫻を植ゑつけて、美しい衣きた人が牛車に乘つて通ります。加茂の祭、祇園の祭、その賑ひは又格別……。いや、このやうなことを一々ならべ立てゝゐたら際限がございませぬ。

女房。聞けば聞くほど面白さうな、樂しさうなところぢや。

童。わしも都へ行きたいなう。

娘甲。これが一足飛びに行かれる所なら、わしも今から行つてみたいが、なにをいふにも道が遠い。

娘乙。行きたい行きたいと云ひ暮して、一生こゝに朽ち果つるのであらう。

商人。おなじ人間に生まれるなら、みやこの人に生まれたが優しぢやなう。

（白菊丸は默して思案す。鐘の聲きこゆ。）

職人。なんぼ春の日が長いと云うても、うか〳〵してゐたら、日が暮れやうぞ。

女房。都のはなしに聞き惚れて、思はず知らず足を止めた。どれ、急いで行きませうか。

娘甲。ほんにそれがようござらう。

職人。では、お兒どの。おわかれ申しますぞ。

（皆々たがひに挨拶して、思ひ〳〵に左右に別れ去る。白菊丸は始終默して立つ。下手より長者の娘櫻子、十六歳、美しく粧ひて被衣をかぶり、笠を持ちて出づ。）

櫻子。おゝ、そこにゐるは白菊どの……。

（白菊丸は答へず、櫻子進みよる。）

櫻子。これ、お兒殿……白菊どの……。なにをうつかりとしてござるのぢや。

（白菊丸は向うをみて夢のやうにひとり言。）

白菊。わしは都へ行きたうなつた。

櫻子。え。（おどろきて摺寄る。）

白菊。おゝ、櫻子どの……。（初めてこゝろづく。）よいところへござつた、こなたには話したいことがある。

櫻子。して、話したい事といふのは……。

白菊。こゝは路傍ぢや。先づ兎もかくも奥へござれ。

（白菊丸は先に立ち、櫻子もつゞいて門内に入る。白菊丸の姉信夫、二十四五歳、旅すがたにて、供の男一人を連れて出づ。）

信夫。これ、こゝが尋ぬる相承院ぢや。

男。なか〳〵大いお寺でござりますな。

信夫。御門前の樣子も、七年前とちつとも變らぬ。おゝ、見おぼえのある彼の櫻、昔ながらによ

う咲いてゐる。

（信夫は櫻を仰ぎてむかし懐かしき風情なり。門内より市若、乙若の兒二人、手に手に櫻の折枝を持ちて走り出づ。あとより春若、冬若の二人、おなじく櫻の枝を振りかざして出づ。）

春若。　えゝ、卑怯な奴ぢや。

冬若。　引返して勝負せぬか。

市若。　おゝ、この廣場で勝負するのぢや。

乙若。　さあ、來い、來い。

春若。　おのれ、負けて泣くまいぞ。

（春若冬若は走りかゝり、双方入りみだれて鬪ふ。信夫も最初のうちは見物してありしが、鬪ひあまりに激しければ、果は見かねて割つて入る。）

信夫。　あゝ、これ、どちらに怪我があつても惡い。勝負は五分ぢや。もう好いほどにさつしやれ。

（信夫は宥める。供の男も捨臺詞にて共々になだめる。）

（二）

相承院の書院。本緣つきの二重屋體にて、庭には所々に櫻の大樹あり。その一枝は斜めに垂れて軒を遮れり。

（白菊丸と櫻子は緣に腰をかけて語る。）

櫻子。　では、お前はどうあつても、都へのぼると云はれるのか。

白菊。　おゝ、わしはどうでも都へ行きたい。

櫻子。　なんぼ行きたいと云はれても、たゞ的も無しに京へのぼつて、身のおちつきを何となさる。

白菊。　都に時めく平家の一門、頼盛の卿が鹿島詣での歸るさに鎌倉御遊覧仰せ出され、この寺中に四日五日も御逗留なされた。その時わしが召出されて……。（腰にしたる笛を取り。）夜々ごとにお聞きに入れたる笛のしらべ、殊のほか御意にかなうて、かばかりの名手を草ふかき東にうづめ置かんも口惜し。われをたづねて都へ上れ、よきに扶持して取らせうと、世にありがたき仰せであつた。

櫻子。　では、平家のおん方を頼りにして……。

白菊。　たづねてまゐらば我身の出世ぢや。

櫻子。　して、お師匠様も御承知か。

白菊。いや、御承知なければこそ今日まで、いたづらに日を送つてゐるのぢや。が、わしもいよいよ思案を決めた。おなじ人間と生まれたら、花のみやこに住居して、美しい家を造り、美しい衣をきて、繪にあるやうな華やかな暮しがして見たい。たとひ師の坊の御勘氣うけても……。

櫻子。え、師の坊の御勘氣受けても……。

白菊。おゝ。

櫻子。わたしを捨てゝも……。

白菊。……。

櫻子。こゝを立退く御所存か。（詰めよる。）

白菊。（ひとり言のやうに。）ゆうべも都の夢をみた。

櫻子。（ひとり言のやうに。）その夢が早く醒めればよいが……。

（ふたりは思ひ〳〵に嘆息す。以前の兒春若出づ。）

春若。白菊どの……。陸奥から姉様が見えられましたぞ。

白菊。なに、姉様が……。どこへ……。

春若。それ、そこへ見えられた。

（下手を指す。下手の庭口より信夫出づ。白菊丸は飛び立つて迎へる。）

白菊。おゝ、姉様か。

信夫。白菊……。久しく見ぬ間に大きうなりました。

白菊。ようぞ尋ねてくだされた。さあ、さあ、これへ……。

信夫。あい、あい。

（信夫も慇しげに走り寄る。）

白菊。こゝは庭先……。先づお上りなされませ。

（信夫は裳の塵を拂ひて、縁にのぼる。）

櫻子。思ひもよらぬ姉様のお越しに、わたくしどもが居つてはお邪魔……。（信夫にむかひ。）お前はゆる〳〵とお話しなされませ。春若も來や。

（櫻子は會釋して、春若と共に去る。信夫も會釋してあとを見送る。）

信夫。あの美しい娘御は……。

白菊。松葉が谷の長者の娘。今おまへを案内して來た、春若といふ兒の姉でござりまする。

信夫。　では、あのふたりは姉妹か。

白菊　弟の縁で折節に、こゝへ尋ねてまゐりまする。いや、それらのことは扨措いて、姉上様、七年振りでおなつかしい御對面、ようぞ無事でゐて下されました。

信夫。　おまへも無事で、まあ目出たい。

（信夫はすり寄って、弟の顔をつく〴〵眺める。）

信夫。　親はなくとも子は育つ。（思はずほろりして。）十六にしては大柄ぢや。親のない子をこれまでに成人さしてくだされた、お師匠様のお世話が思ひやらるゝ。日頃から逢ひたい逢ひたいと思うてゐても、おまへは鎌倉、わたしは陸奥と、たがひに遠く引き分かれては、文通さへも思ふにまかせず、蔭ながら案じてゐるばかり……。白菊、察してたもれ。

白菊。　わたくしとても同じこと。お顔がみたいと思うても、みちのくの果では行くにも行かれず、せめてもの心遣りに、おまへが置土産にしてくだされた此笛を、あけても吹き、暮れても吹き、しだい〴〵に吹きおぼえて、今では鎌倉にならび無き笛の上手となりました。それも約りはお前の御恩、ありがたうござりまする。

信夫。　おゝ、その笛は七年以前、おまへにわかれて陸奥へくだる時、置土産にと殘したもの。今も持つてゐやるのか。

白菊。　お前のお傍にゐる心で、一日も身を離したことはござりませぬ。

（白菊は笛をみせる。信夫は手にとりて嬉しげに見る。奥より當院の住職自休藏主、六十餘歳。珠數を持ちて出づ。）

自休。　めづらしや、信夫どの。ようぞ尋ねてまゐられたの。

信夫。　これは、これは、お師匠様。その後は打絶えて御機嫌もうかゞひませぬが、いつもお健かでおめでたう存じまする。

自休。　唯今春若の話を聞いて、とりあへず逢ひにまゐつたが、むかしに變る女房振に、もしや人違ひかと一度は疑うたくらゐぢや。はゝゝゝゝ。兎にかくに無事で重畳々々。して、お連合にも變ることはないか。

信夫。　夫は陸奥生まれの荒氣の武士、ひまさへあれば野山を狩り暮して、つひぞ一度煩うたこともござりませぬ。

自休。　はゝ、それは猶更めでたいことぢや。（云ひつゝ白菊丸を見かへる。）なんと姉上、白菊もこのやうに成人しましたぞ。

信夫。それも皆お師匠様の御恩。いくへにもお禮を申上げまする。この通りの我儘者でござりまするば、惡いところは叱つて敎へて、行末長くお目かけられてくださりませ。

自休。それはお身がいふまでない。學問も好き、生れ付きも賢し、末たのもしい若者ぢやで、道心堅固に育てあげ、行く行くは當院の二代の住職を襲がさうかとも存じて居るのぢやが、若いものには兎角に迷ひが出てなう。

（自休は苦笑ひするに、信夫は心ならず。）

信夫。では、なにか弟に不心得の儀でもござりましたか。

自休。いや、いや、左のみ心配することでもないが、若い者にはまゝある習、かやうな草深い田舍を嫌うて、花やかな都へゆきたいと云ふを、わしが叱つて止めて置きますのぢや。久振りで姉御が見えたは幸ひ、お身からもよく意見してくだされ。

信夫。これは思ひもよらぬこと……。これ、白菊、お前はなんで都へ行きたいのぢや。

白菊。都は好いところと聞きました。

信夫。よい所があれば何處へでも勝手にゆく氣か。この鎌倉といふ土地は、お前の生まれた故郷ぢやぞ。

白菊。お前とても故郷を捨てゝ、他國に暮してゐるではござりませぬか。

信夫。わたしが他國に暮してゐるは、自分が好んでのことではない。故郷に居たうても居られぬからぢや。七年以前父母に死別れ、姉と弟が途方に暮れてゐるときに、宿りあはせた陸奥の武士が、わたしを妻にして連れて行かうといふ。嫌といへば姉妹が飢ゑて死なうも知れぬ場合、泣く〳〵わたしは承知したが、せめてお前だけは故郷にのこして、父上や母上のお墓を守つて貰ひたさに、このお寺にお願き申して、けふまでお世話を願うてゐる。それはおまへも知つてゐる筈。今更他國へ行かうなどとは、以てのほかの心得違ひ、たとひお師匠様が御承知なされても、この姉が許しませぬぞ。

（白菊丸は默して答へず、自休も膝をすゝめる。）

自休。それも修行のために、叡山へのぼりたい、あるひは三井寺へ行きたいと云ふならば、承知すまいものでもないが、そちが都へ行かうと望むは、榮華を慕ふこゝろと見た。そのやうな心がけでは、身の行末が案じらるゝ。たつて都へのぼりたくば、今二三年も修行の功を積み、道心堅固をみとゞけた上で、わしがあらためて許してやる。先づそれまでは辛抱せい。

信夫。（物柔かに諭せども、白菊丸はなほ答へず。）お師匠様があのやうに仰しやるを、お前にはまだわからぬか。南の鳥はみなみの枝に巣をつくり、胡の馬は北の風は嘶くといふ。鳥獣すらも故郷を忘れぬものを、人間とうまれて故郷を捨て、おのが勝手に飛びあるかうとは、故郷の空が戀しうないか。故郷の土がなつかしうないか。お師匠様、弟にはどうしてこのやうな魔がさしたのでござりませうな。

自休。魔がさした基は、それ其笛ぢや。さきごろ都の由ある御方が、當院に御逗留のみぎり、白菊がその笛を吹いてお聽きに入れたら、殊のほかに御賞美あつて、かゝる笛の名手を田舍に朽ちさするも無念、みやこへ來よと仰せられたが、かれの心を迷はす初めぢや。

信夫。（笛を再び取上げる。）おきみやけに殘したこの笛を、次第々々に吹きおぼえて、鎌倉一の上手になつたと、自慢らしう云うたもその爲か。今更おもへば別るゝ際に、このやうな物を殘してゆかずば、迷ひの種も作るまいものを……。姉のなさけが仇となつた。いつそ斯うして……。

白菊。（信夫は緣さきに出で、笛を緣に打ち付けて折らんとするを、白菊丸はあわてゝ縋り止める。）あ、これ、なんとなされまする。

信夫。このやうなものは折つて捨つるのぢや。

白菊。一旦わたくしに下されたもの、お前の自儘にはなりますまい。まあ、まあ、お待ちくださりませ。

信夫。（笛を無理に奪ひかへす。信夫は詰め寄る。）それほど執心の笛ならば、返して遣るまいものでもないが、その代りには今日かぎり、再び笛を吹かぬと姉に誓や。又、都へ行つて見たいなどと、この後決して云ふまいぞ。

白菊。折角のお詞ではござりまするが……。

信夫。えゝ、まだそのやうな夢を見てゐる。お前ももう十六、やがてその髪を剃り落して、出家の勤めをする身でないか。世捨人の身となつても、都の榮華が慕はしいか。

白菊。その出家となるのが嫌になりました。この黒髪をそり落しては、出家も榮華もかなひませぬ。

信夫。なに、出家が嫌になつたと……。

（呆れて自休と顔を見あはせる。自休はつか〳〵寄つて、白菊丸の襟上をつかむ。）

自休。これ、白菊。先頃から頻りに都へゆきたいといふ。それも若い者の習と免して置いたが、

さてはおのれ、佛の道を去つて、みやこの花に浮かれ狂ふ氣か。さりとては淺ましい。親のない子を育てあげて、十歳の年からあけくれに、教へた經文をなんと聽いた。用家が嫌とはどの口で云ふことぞ。佛の教にそむき、師の恩をわすれ、姉のなさけを仇にして、みやこへゆきたい、還俗したい、榮華の暮しがしたいとは、呆れ果てたる不所存者め。

白菊。　お師匠様……。まつぴら御免くださりませ。

信夫。　詫びるは改心するといふのか。

白菊。　おわびは御恩にそむいた申譯……。お師匠様の御意見でも……。

自休。　改心は出來ぬと云ふか。むゝ、この上は論は無益。おのれのやうに性根の腐つた奴、たとひ私が赦しても、御佛がおゆるしなされまい。姉御の見るまへで、師匠が破門する、勘當する。都へなりと地獄へなりと、行きたいところへ勝手にゆけ。

（自休は白菊丸の襟上を把つて、庭に突き落す。木かげに窺ひぬたる櫻子走り出でゝ、白菊丸を介抱す。）

櫻子。　これ、白菊どの。わたしが先刻も云はぬことか。お師匠様の勘當うけてもお前は都へ行きたいか。もし、そこにゐる姉上様。泣いてばかりござらずと、お詫をして上げてくださりませ。どうぞおたのみ申しまする。

信夫。　頼まれいでも一人の弟、お詫してやりたいは山々なれど、なにをいふにも此の始末、現在の姉すらも呆れてゐまする。（涙をぬぐふ。）

櫻子。　御もつともではござりまするが、そこを幾重にも御勘辨……。（更に白菊丸にむかひて。）これいかに心が狂へばとて、お師匠様の御怒りや、姉上様のお嘆きが、お前の眼には見えませぬか。けふかぎり心を入れかへて、都のほりは思ひとまつた、還俗も思ひ切つたと、早う云うてくださりませ。これ、白菊どの……。

（白菊丸は默して頭をふる。信夫は堪へかねて、縁より降り立つ。）

信夫。　三方四方から道理をわけて、これほど云うても判らぬとは、憎いを通り越して恨めしい。百里をへだてた陸奥から、はる〳〵たづねて來た姉を、おまへは泣かして歸す氣か。鎌倉にのこした弟は賢い者、ゆく〳〵は天晴れの名僧智識にもなりませうと、夫に日ごろ自慢したが、今となつては恥かしい。どうでも改心せぬとあれば、お師匠様ばかりでない、わたしも緣を切りますぞや。姉と思ふな、弟でない。

（心強くは云ひながらも、溢るゝ涙をとゞめ兼ねて、信夫は思はず袖を眼にあつれば、櫻子も其

こゝろを察して共に泣く。）

自休。　いや、いや、いつまで云うても同じことぢや。わしも思ひ切つて弟子を捨てた。姉御も思ひ切つて弟を捨てられい。ひとの弟をあづかつて、かやうな不所存者に仕立てたは、師匠の徳の至らぬためぢや。姉御に對して面目ない。そのお詫もしたし、なほ相談したいこともある。信夫どのには兎もかくも奥へ……。

（自休は起ち上る。信夫は弟を見かへりつゝ泣く〳〵起つて行かんとす。白菊丸は思はずその袂にすがる。）

白菊。　あゝ、もし……。

（信夫は引止められて猶豫ひしが、無言にて袂を拂ふ。白菊丸はまた取付く。）

白菊。　姉上様。しばらくお待ちくださりませ。

信夫。　待てと縋つて止むるのは、改心したと云やるのか。

白菊。　は……はい。（淀みながら云ふ。）

櫻子。　では、おまへは改心して……。

自休。　都登りは思ひとまるか。

白菊。　思ひ止るでござりませう。

信夫。　おゝ。

（信夫は弟の手をとりて喜ぶ。白菊丸は心苦しき體にて、ぢつとなる。自休も櫻子も顔を見あはせて安堵したる體なり。春の日やうやく暮れんとす。）

（三）

もとの門前。ゆふ闇に櫻の花のみ白し。

（日暮れて路をいそぐ男女一四人。左右より出で來りて門前を過ぎ去る。鐘の聲きこゆ。門内より白菊丸は蓑をかゝへて忍び出づ。鐘の聲つゞいて聞ゆ。白菊丸はあたりを見返りて、蓑を着る。やがて二足三足ゆきかけしが、あとに心のひかさるゝ風情にて、また立戻りて門内をうかゞふ時、見春若、門内より忍び出で、かくと見るよりつか〳〵と走り寄り、無言にて白菊丸の蓑をつかむ。）

白菊。　おゝ、春若か。

春若。　お前はどこへ行かしやります。

白菊。　あゝ、これ、靜に……。（左右を窺ひつゝ。）おまへも知つてゐる通り、わしは心願の筋があ

見が淵

つて、毎夜江の島の窟へ參詣する。今夜もこれから詣るのぢや。かならず人に云ふまいぞ。

春若。いや、そりや嘘ぢや。お前はこゝを逃げて行くのであらう。

白菊。え。

春若。わしの姉様が云はしやれた。白菊どのはいつこゝを抜け出して、遠い都へ行かうも知れぬ。お前はそばにゐて始終氣をつけいと……。

白菊。姉の櫻子が云ひつけたか。

春若。あい。

白菊。その懸念はもつともぢやが、わしは皆様の御意見で、都のほりはふつゝりと思ひ切つた。決して逃げて行きはせぬ、一時の後には戻つてくる。さあ、放しやれ。

（振放して行かんとするを、春若はなほ遮りて頭を掉る。）

白菊。はて、聞分けのない。わしはすぐに戻るといふに……。さあ、邪魔せずに放しやれ。わしの云ふことを肯かぬと、今夜からお前の好きな化物噺をして聞かせぬぞ。ぢやによつて、早う放しやれ。よいか、判つたか。

（だましつ賺しつ振放さんとすれど、春若は遣らじと縋ばる。そのはずみに、白菊丸の腰に挿みし彼の笛を落す。春若はあわてゝ拾ひ取る。）

春若。おゝ、笛が落ちた。

白菊。それはわしが大事の物ぢや。

春若。これがほしくば内へ歸らつしやれ。

白菊。まあ、兎も角もわしに……。

春若。忌ぢや、忌ぢや。

（春若は笛を持つて門内へ駈け入る。）

白菊。あゝ、これ、返してくだされ。

（白菊丸もつゞいて門内へ駈け入りしが、やがて笛を持ちて再び走り出づ。あとより春若は追つて出で、又もや蓑に縋る。）

白菊。（持餘す。）えゝ、面倒な。放さぬか。

（振拂ふはずみに、着たる蓑はするりとぬげて、春若は蓑をつかみしまゝ倒る。白菊丸は笛を拾ひて走り去る。）

春若。白菊殿……白菊どのう……。

（櫻の花ばら〳〵と散る。）

第二幕

江の島の窟に近き岸邊、岩石聳えて所々に松の大樹あり。春のおぼろ夜、浪靜なり。

（濱の娘二人立つ。傍に魚籠などあり。）

娘甲。今夜は風もなし、あたゝかい晩でござるなう。

娘乙。これがおぼろ月夜とでも云ふのであらう。

娘甲。常に見馴れた海ながら、かういふ晩には、又一入の眺めではござらぬか。

娘乙。よい景色といへば、あの容貌のよいお兒殿が、今夜はまだ見えぬやうでござるな。

娘甲。どういふ心願があるかは知らぬが、先月から窟の辨天樣へ、夜ごと夜毎に參詣して、こゝらの岩に腰をかけ、海にむかつて笛を吹いてゐるとは、ほんに優しいことではないか。

娘乙。わたし等に笛の上手下手はわからぬが、美しいお兒の顏が見たさに、さつきからこゝに待つてゐれど、今夜はなぜかまだ見えぬ。

娘甲。いつもはもう來る時刻ぢやに……。（向うを見る。）いつまで待つても、果しがあるまい。

娘乙。思ひ切つて歸るとしませうか。島の入口までは一筋道、途中で逢はぬとも限るまい。

娘甲。逢うたとて物ひと言云ふではなけれど、お顏をみねば氣が濟まぬ。

娘乙。お前もか。

娘甲。お前もか。

二人。ほゝゝゝゝ。

（ふたりは笑ひながら魚籠の始末などする。時の鐘。）

唄　忍ぶ身は、月のおぼろをたよりにて、よそ目にそれと白菊が、香やはかくるゝ振袖の、袂も長き濱づたひ。

（二人は魚籠など抱へてゆきかゝる。向ふより白菊丸は笛を持ちて出で、途中にて二人にゆき逢ひ、顏かそむけて過ぐ。二人はたがひに囁きあひて、見かへり〳〵向うへ去る。白菊丸は海をながめて立つ。おぼろ月やうやく明るく、相模の海は遠くみゆ。）

白菊。お師匠樣や姉上や、櫻子殿に意見されて、一旦は思ひとまると誓うたれど、いかに思ひ直しても都戀しく慕はしく、ひそかに寺をぬけ出して、こゝまで無事に落ちのびたれば、追

手のかゝる氣遣ひもあるまい。都のほりを思ひ立つてより、この願かならず叶ふやうと、窟の辨財天に三七日の參詣、かぞふれば丁度滿願の夜に出立するも神の冥助ぢや。

唄〻神にねがひを掛卷も、あやなき胸の雲晴れて、今宵うれしき鹿島立。

（白菊丸はひざまづきて窟のかたを拜し、更に月を仰ぐ。）

白菊。これまで夜な夜なこゝへ來て、好める笛を吹きすさびしが、窟詣でも今宵が名殘ぢや。せめて一曲を神にそなへん。

唄〻松吹く風も音絶えて、ふけ行く夜に笛の聲、海の底までひゞくらん。

（白菊丸は唯ある松の根に腰うち掛けて、月に對して笛を吹く。涙の音しづかにきこゆ。白菊丸はやがて笛を吹きやめる。）

白菊。幸ひに邪魔する人もなく、心のまゝに奏でし調べ、神も納受せられたであらう。（起ち上りて四邊をうちながめ。）今まではなんの心もなかりしが、十六年來すみ馴れし、生れ故郷の土を踏むも、今月今宵をかぎりと思へば、おのづと後髪がひかるゝやうぢや。故郷の土がなつかしいと、先刻姉上が云はれたも、今となつては思ひあたつた。（嘆息せしが又思ひかへして。）いや、いや、一旦こゝを立退いても、一生還れぬと限つたことでもないに、今更あとを見かへるは、われながら心が弱い。（われを嘲けるごとくに笑ひて。）夜の更けぬ間にいざ行かうか。

唄〻行手をいそぐ後髪、ひくや霞の浪間より、浮ぶがごとき人の影。

（白菊丸は笛を袋に收めて、もと來し路へ行かんとす。上手の岩のかげより賤の女、實は龍女の化身あらはる。）

女。あ、もし、しばらくお待ちなされませ。

白菊。こゝらには見馴れぬ女性、それがしに御用とは……。

女。御存じのないも道理。わたしは遠い都の生まれ、この頃こゝへ移り來たものでございます。

白菊。なに、都の生れ……。（なつかしげに立寄る。）都と聞けばなつかしい。それがしもこれより都へ登らうと存ずるのぢや。

女。それはお止めなされたがようございますぞ。

白菊。とは又、なぜに……。

女。おまへは鎌倉にならびなき笛の名人、夜な夜な來りて笛をふき、窟の龍女も感應ましませ

しに、今やこゝを立退いて他國へ行かうとせらるゝ時は、龍女これを惜ませたまひ、お前のゆく手を遮つて、いかなる祟をなさうも知れませぬぞ。

白菊。いや、いや、神は人を救ひこそすれ、罪なき人を憎ませ給ふいはれはあるまい。

女。いや、憎むのでない。鎌倉一の笛吹きといふ、お前のわざを惜まるゝのぢや。それでもお前は思ひとまりませぬか。

白菊。一旦思ひ立つては矢も楯もたまらぬこそ、みやこの春にあこがれて、師匠に背き、姉にそむき、故郷をすてゝゆく白菊丸。神や佛のひかへ綱でも、ひき戻すことはよも出來まい。お身は都のうまれと聞くこそ幸ひ、これより都へのぼる海道筋を、委しう敎へては給るまいか。

女。所望とあれば、敎へまいものでもなけれど、これより百里にあまる道中には、さま〴〵の難所がござるぞや。

白菊。して、その難所といふは……。

女。先づ山々をかぞふれば、伊豆と相模の境には、人も知つたる箱根山、のぼり降りにゆき惱み。

女。唄へ休らふひまも夏草の、露にしをるゝ旅衣、うら悲しくも駿河路や、蔦の細道越えゆけば。

白菊。宇津の山邊のうつゝにも、夢にも人に逢はぬとよ。

女。唄へ川は天龍大井川、岸うつ浪もすさまじく、雨の夜、雪のあしたには、棹さし渡る船も無し。

白菊。まだそのほかに數々の難所もあるに、年端もゆかぬ身のひとり旅、あやまちあらば悔んで返らず。

女。折角の諫めなれど、道中の難儀はかねての覺悟、たゞ一筋に都をさして……。

白菊。どうでもこれより發足か。

女。心もせけばお暇申す。早やおさらば……。

白菊。唄へゆくを遣らじと引き止めて、風に縋るゝ青柳の、絲のみだれの果てしなや。

女。いや、いや、それへ行つては路が違ふ。片瀬へまはる近道を、わたしが敎へて進ぜませう。

白菊。なに、近道がござるとや。

女。さあ、わたしについて斯うござれ。

唄へ云ふかと思へば岩がくれ、すがたは消えて失せにけり。

（女は上手のかたへゆくかとみれば、姿は岩のかげに消ゆ。月やうやく暗し。）

白菊。　おゝ、忝けなうござる。それへまゐるが近道とは、今までちつとも存じ申さぬ。なにとぞ御案内をたのみ申す。

（白菊丸は眼にみえぬ人と語るがごとく、獨りうなづき、ひとり語りつゝ、これも上手の岩かげに入る。自休藏主は松明を持ち、あとより信夫もつゞいて出づ。）

自休。　思ひとまると見せながら、隙をうかゞうてぬけ出した白菊丸、重々憎い奴とは思へども、姉御の頼みもあり、わしもなにやら心許なく、あとを追うてこゝまで來たが、まだ遠くは行くまいなう。

信夫。　島の入口でゆき逢うた、あの娘達の話によれば、弟は窟へまゐつたとやら。

自休。　兎も角もそこらを探してみようか。

（二人はおぼつかなげにあたりを見まはす。月再び明るし。）

自休。　おゝ、幸ひに月が出た。

（自休は唯ある岩にのぼりて、向うをみる。笛の聲遠くきこゆ。）

信夫。　お師匠様、あちらで笛の音が……。

自休。　むゝ。笛がきこゆるやうぢやの。（なほも向うを見る。）や、白菊はあれにゐる。海に突き出た岩の上で、笛をふき澄してゐるやうぢや。

信夫。　おゝ、弟はあれに居りまするか。

（云ふ時、あなたにて水音高くきこゆ。）

自休。　あ、白菊は……。海へ飛んだ。

信夫。　え、弟が海へ身を投げましたか。

（信夫はおどろきて倒る。自休は岩の上より海を望みて嘆息す。）

自休。　岸は屏風のごとき岩、下は千尋の海の底……。むかしよりこゝへ沈みし人の浮び出でたる例はない。

信夫。　では、弟を救ひあげる、思案も工夫もござりませぬか。

自休。　定まる業とあきらめられい。白菊は鎌倉にならびなき笛の上手、龍女感應ましまして、都へ遣るを惜ませたまひ、あるひは彼を海の底へ……。

信夫。　え。

自休。（耳をかたむける。）あれ聞かれい。かれの姿は沈み果てゝも、笛の音ばかりはどこやらで。

信夫、おゝ。（伸びあがる。）

自休。底深き海の祕密、人間の智慧では測り知られぬ。南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。

（自休は海にむかつて念佛す、信夫も泣く〳〵合掌す。涙の音しづかに、いつこともなく笛の聲きこゆ。）

幕

綺堂脚本集第八卷
【定價金貳圓參拾錢】

大正十四年八月廿四日印刷
大正十四年八月廿七日發行

著作者　岡本敬二
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者　和田利彦
東京市京橋區南鍛冶町十一番地

印刷者　川村清次郎
東京市京橋區南鍛冶町十一番地

印刷所　川安印刷所

著作者檢印

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
（電話大手五一一・日本橋五一一）
（振替口座東京一六一七）
春陽堂

文藝書類

夏目漱石著	刷縮	鶉籠（小說集）	金貳圓料十五錢
同著	刷縮	三四郎（長篇小說）	金壹圓九十錢送料十五錢
同著	刷縮	それから（長篇小說）	金壹圓九十錢送料十五錢
同著	刷縮	門（長篇小說）	金壹圓九十錢送料五錢
同著	刷縮	彼岸過迄（長篇小說）	金貳圓送料十五錢
同著		倫敦塔 外三篇（小說集）	金七十三錢送料四錢
同著		夢十夜（短篇集）	金六十六錢送料四錢
同著		滿韓處々（紀行）	金六十六錢送料四錢
同著		思ひ出す事など（感想集）	金七十三錢送料四錢

527
16

終